星の花が降るころに (2)

安東 みきえ

（ある日の昼休み、「私」は夏実と仲直りをしようと、廊下で待っていました。）

夏実とは中学に上がってもずっと親友でいようと約束をしていた。だから春の間はクラスが違っても必ずいっしょに帰っていた。それなのに、何度か小さな擦れ違いや誤解が重なるうち、別々に帰るようになってしまった。おたがいに意地を張っていたのかもしれない。

①お守りみたいな小さなビニール袋をポケットの上からそっとなでた。中には銀木犀の花が入っている。もう香りはなくなっているけれどかまわない。（中略）

夏実の姿が目に入った。教室を出てこちらに向かってくる。

そのとたん、私は自分の心臓がどこにあるのかがはっきりわかった。②どきどき鳴る胸をなだめるように一つ息を吸ってはくと、ぎこちなく足をふみ出した。

「あの、夏実――」

私が声をかけたのと、隣のクラスの子が夏実に話しかけたのが同時だった。夏実は一瞬とまどったような顔でこちらを見た後、隣の子に何か答えながら私からすっと顔を背けた。そして目の前を通り過ぎて行ってしまった。③音のないこま送りの映像を見ているように、変に長く感じられた。

比喩を用いた描写

本文では、さまざまな比喩表現が用いられている。

（例）音のないこま送りの映像を見ているように

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「お守りみたいな……そっとなでた」とあるが、ここから読み取れる「私」の心情として適当なものを選びなさい。

ア　夏実との仲直りが成功することを確信する気持ち。
イ　夏実と昔のような関係に戻れるように祈る気持ち。
ウ　夏実と仲直りできるか不安で、なげやりになる気持ち。
エ　夏実が自分を無視したことで、落ち込み嘆く気持ち。

〔　　〕

(2) ――線②「どきどき鳴る……息を吸ってはくと」とあるが、このときの「私」の様子として適当なものを選びなさい。

ア　思い通りにことが進み、興奮する様子。
イ　夏実に会うことができ、喜ぶ様子。
ウ　思いがけない出来事にあわてる様子。
エ　夏実に声をかけることに緊張する様子。

〔　　〕

(3) ――線③「音のない……感じられた」とあるが、この表現が意味することを選びなさい。

ア　夏実が「私」の前を通り過ぎて行くまでにいつもより長い時間がかかったこと。
イ　自分を無視するような夏実の態度に、「私」の怒りがこみあげていること。
ウ　とまどったような夏実の顔が意味することに、「私」が思いをはせていること。
エ　思いもよらず夏実が自分から顔を背けたことに、「私」がぼう然としていること。

〔　　〕

(4) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア　「私」と夏実は中学に上がって同じクラスになった。
イ　「私」と夏実は次第に別々に帰るようになった。
ウ　夏実は「私」が声をかけたのに気がつかなかった。
エ　結局「私」は夏実に声をかけられなかった。

〔　　〕